

近く發見されたる西山證空上人の

觀經疏大意の研究

上 杉 慧 岳

予が昨年の秋、本誌第二卷第四號上に、證空上人の著書に就きての研究を發表せし際には、上人の述作として傳へらるゝ書及び法語等二十九部を擧げ、其の中に、予が法福少くして未だ閲讀の幸を得ず、且つ又、他より現存する事も聞かざりし爲め、存缺不明として出せしもの二部ありき。

即ち觀經大意一卷と觀經惣釋一卷となり。此の二部の書が、西山上人の著書として示されたるは文政三年刊行の淨土論題指塵集なり。指塵集には二部共に寫本と記せり。又文政四年刊行の五段鈔安心鈔二部合刻本の序文（廣谷龍空義道の所記）に西山國師の著作を列記する中には、觀經疏大意一卷の現存せし事を記せども、觀經惣釋の名は記し居らず。又此の觀經大意と觀經疏大意とは、或は別の書なるやも知れざれども、當時予は同一の書として、兎に角現存するや否やも不明なりし爲め、惣釋と合せ、此の二部を不明の部に掲げたりき。然るに其後、同學の一友ありて、今春予の寓居を訪ね、觀經疏大意の現存することを報じ、且つ禪林寺帖澄師手澤の本が市内東寺近くの某寺に秘藏

してある由を告げたり。依りて予は道友を経て、其後直ちに右手澤本の借覽を乞ひしに、幸にも快諾を得て此を謄寫する事を得たり。依りて今帖澄所持の本を檢するに、外題内題共に、「觀經疏大意」と記し、内題の下には「西山善峯寺沙門證空記」とあれども、卷末の後題には、「觀經大意抄」と記されたり。前後の題名の少しく異なるは、如何なる理由なりやに就き、確たる文證はなけれども、今抄は僅に十六紙に過ぎざる一小冊なれど其の内容を見れば、證空が善導疏に對する見解の概要を、最も簡明に自ら抄記したるものなれば、觀經疏の大意と云ふ題號は寧ろ至當のものと思へらるゝなり。然し證空にありては、彼の秘決集二十卷が四帖疏の秘決集にして、同時に觀經の秘決集なる如く、今此の四帖疏の大意は、此れまた直ちに觀經の大意なることを意味するものなり。故に後題に觀經大意抄とある事も、何等前の題號と相違する義旨を示すものにあらざることと思ふなり。尙奥書には、

維時文化七庚午年七月十九日於金林蘭若

瑞恩拜寫之

とあり。文化七年は、帖澄の入寂に先たづ二十年前なれば、此書は同師が晩手に入手せし書なる事を知る。表紙の表右下部には帖澄の二字を記せり。恐らく外題と共に其の肉筆なるべし。帖澄は、光明寺亮範と同時代の人にして、此の兩人は共に西山派古代の宗書の發見に努め、就中帖澄は五段

抄安心抄、證得往生義等の古書を此の大意と共に發見せし功勞者なりと傳ふ。五段抄安心抄等は其後早く刊行されて流行されしも、此の大意は刊行の運に至らず寫傳されしものならむ。但し湮滅せんとして漸く今日に流傳することは、蓋し帖、亮二師流傳の功に依るものと云ふべし。今此の觀經疏大意を見るに全く漢文體なり、然し其の文體並に返り點、及び送り假名は極めて不完全のものにして、且つ文字に寫誤多き爲め、たとひ帖澄の校合せし努力の跡を認むれども未だ充分ならず、聞々判讀し難き所あり、恐らく證空所記の原本は和文なりしを、後人漢文體に改めし爲め、却りて著者の意を盡くさざるに至りしに非ずやと考へらるゝ點多し。近頃傳ふる所に依れば、尙、光明寺本山には他に一二部の古寫本の存すること發見され、此度創刊さるゝ西山敎義研究誌第一號には、其全文は校合されて出づ。此れ實に西山敎義研究の爲めには慶福の至りなり。その刊行を待つて、靜に研鑽すべきが順序なれども、予は永らく此抄の閲讀を希望せし所、今幸にも帖澄手澤の本によりて、此を披讀することを得たるに依り、其の喜の餘り、敢へて此の一文を草し、今鈔に示されたる、證空の敎義に就き、其の論究を試み斯道識者の批判を乞はむとするものなり。

此鈔の述作年代に就きては、何等の史證の徵すべきものあるを聞かず。然し證空の他の著作全般に現れたる彼の思想の發展、及び其敎義組織の次第より此を深く考察すれば、此鈔に於いて證はれ

たるものは、證空の極めて圓熟したる思想にして而も其が極めて簡明に、又能く徹底して論述さるゝ點より見れば、寧ろ此は他の著書よりも比較的晩年の述作にして、恐らく彼の他筆鈔の講述前後の作なるべしと思考さるゝなり。依りて今其の内容を研尋するに、先づ開卷最初には、

念佛宗者會ニシテ諸經ヲ入ニ觀經ニ。開ニシテ諸善ヲ攝ニ念佛ニ。定散相分ニ入ニ萬四千也。能詮ニ念佛ニ一行ヲ。弘誓多門四十八。專ラ標ニ念佛ニ之一願ニ。號ニ諸善ヲ於能詮ト。名ニ念佛ヲ於所詮ト。以此ノ分別之智ニ名ニ觀解ト。十六觀門是也。發ニ此ノ觀門ヲ智ヲ歸ニ弘願ニ。佛三昧是也。能詮所詮ハ猶分別之義也。觀門弘願ハ開會之釋也。此ノ四ノ道理者不ニ相離ニ法也。

と示し、善導の五部九卷の疏は、全く此の義旨を述ぶるの外なし。一宗の主旨は此に過ぎず。依りて今此の義旨を演べて、次に問答を施設するものなりとて、以下二十番の問答を建て居れり。而して此の二十番の問答終りト左に及びては、行を改め、華座觀三尊事と標題を掲げ、更に其の下に二番の問答を設けて此を釋し以て此鈔の卷を閉ぢ居れり。されば今鈔一部を通觀するに、其の要は此の卷頭の文にて盡くされたるものと云ふべく、觀門弘願の關係、能詮所詮の意義を論究し、以て諸經を觀經に會入し、定散諸善を開して念佛に攝せしむる事が、實に念佛一宗の大意にして、又其が善導の觀經疏の大意たるべく、同時に釋迦觀經の大意なりと見る釋意なることが知らるゝなり。尙此の釋義の詳細は下に至りて論定せんとす。

二十番の問答の内容に就きて研究するに、大略左の如し。以下本文を引用することは此を略す。幸に近く此鈔の全文が、西山教義研究誌上に掲載さるゝ事なれば、鈔文の仔細は彼に就きて意を得られむ事を乞ふ。

第一問答。善導大師は何宗の人なるやに就きて問起し、何宗の人なりやは不明なれども、五濁五苦の凡夫は念佛三昧に歸する外には、他の方便なしと心得て、觀經の本意に任せて諸經を料簡し給ふ人なることを示せり。此は文は簡短なれども、證空が善導疏に對する自己の見解を、一言に概説したるものと云ふべきなり。即ち證空の見解は、觀經の序分には、聖道一代の行門報を攝し來り、此の行門教に對して正宗分には觀門を開説す、此は行門自力教より觀門他力教に歸入すべきことを説き示したるものなり。而して此の正宗分の觀門教とは所謂十六觀定散二善にして、此の二善は實は能詮の教行として説れたるものにして、即ち所詮の弘願念佛の功德を詮顯する所の行なり。故に此の能詮の觀門は、所詮の弘願念佛を詮はす所に、その存立の意義あるものにして、同時に能詮所詮は相離れて別立し難く、能詮の觀門を離れて、所詮の弘願を認め難きものなり、従つて行門より觀門に歸入し、一度觀門の謂を知れば必らず其觀門に留らず、直ちに弘願念佛に歸入すべきなり。故に觀經一部は聖道の諸教を淨土教に歸攝し、更に此を觀門より弘願の他力念佛に歸入せしむるものなり。依りて一經は釋迦一代教の一縮寫圖なると共に、其は定數二善の能詮教を以て弘願念佛を詮

はす所のものなり。此の如く一代佛教が、すべて弘願の一念佛三昧に歸入すべきものなる事が知らる處に、始めて能説の佛意、即ち、釋尊の一代佛教開説の本意も知らるゝなり。聖道八萬四千の教は定散萬行を一々説く事に於いては誠に委細なものなれども、此の二善が弘願念佛を詮顯する能詮の行なることは、未だ其諸經の面には顯れ居らず。故に諸經所説の定散は、此の弘願の念佛とは、遠く懸け離れた行業にして、全くその利益なきものなり。聖道教の行が行門の行と謂はれ、また自力行と名けらるゝは此の所以なり。然し乍ら此の行門自力、一代教所説の定散萬行が、一度觀經に顯はれたる佛の説意よりして眺めらるゝときは、始めて其は念佛に離れて別立すべきものに非らざることが知られ、すべては彌陀の弘願念佛を詮顯する行なること、換言すれば生佛一體、俱時成就の正覺の、彌陀實體の功德を表現する行なることが認められ、此に一切行は眞實の行として利益あるものとなるなり。而して此の聖道教所説の定散萬行が、觀經の佛意よりして、弘願念佛に離れず而も念佛の功德相を表詮するものと認知された上は、すでに其の行業のすべては、行門自力の行にあらずして其のまゝ觀門他力の定散にして、一經所説の定散と同價値のものたるべきなり。故に聖道諸教の定散萬行と、觀經所説の二善行とは、其の本質に於いては全く別體のものにあらず。但、此を認むる行者の執見よりして、一は行門自力一は觀門他力と名けらるるまでなり。釋尊が淨土爾前の教説として、聖道八萬の教を説かれたのは、自力定散の萬機を誘引し、觀門他力の淨土門に歸入

せしむる爲めに、暫く機の執見に隨從して、能詮所詮觀門弘願の關係を隱くして、定散行を種々に説きしものなり。故に淨土敎を離れて、聖道敎其のものには、何等證り得べき利益の存在する道理はなきなり。聖道行門の敎に依りて、自力定散の機が、淨土觀門に歸入する處にて、始めて聖道敎開説の意義も明になり、一切の機が利益さるゝに至るものなり。而して定散萬行は、弘願念佛を詮顯する能詮の行業なりと認め得る觀智、即ち他力觀門の領解が発得せし以上は、行門の定散行は其儘他力觀門の行業として生ける行と轉成すべきなり。行門の定散以外に、此と別體の觀門の定散が存在すると云ふにあらず。捨つべきは自力の執見に外ならざるなり。此の行門・觀門・弘願の關係が明瞭に顯説されしものが實に觀經の敎説なり。而して此の佛説の本意を洞察し得て、佛意を闡明ならしめ、更に一代敎の説意並に其歸趣の何たるかを開發せしものが、善導大師の四帖の疏、並に具疏の所釋に外ならぬ。古來觀經を釋せし人師は數多き事なれども、皆各々自己が依れる宗旨眼を以て此を解するが故に、眞實に佛意を獲たる人なし、今善導は何宗の人なるやは不明なれども、正しく佛陀の密意をとらへ得て、一代佛敎の旨歸、經説の本意を明にし、末代五濁の凡夫、すべて弘願の念佛三昧に歸入する所にて、出離生死の大事は成すと示し給へり。此れ古今楷定の善導が諸師に異りて、如來の眞意を詮はし給ふ所なりと云ふが、證空の善導に對する信念にして、又其の疏を通じて、觀經並に一代敎に對して得たる見解なり。依りて今の文にも「以凡夫亂相。出_二生死_一事。歸_二

念佛三昧一外。全無他方便一得意。任觀經本意。料簡諸經現文也」とあるなり。觀經の本意に任せて諸經の現文を料簡するとは、一經正宗の二善念佛の關係、即ち觀門弘願の交際、能詮所詮の意義よりして、一代敎所説の諸行を批判する事を指せるものなり。

第二問答。諸宗の大師各々觀經に就きて釋を造れり。然るに善導は何故に是等諸師の解釋に異りて別宗を立つるやに就き。所謂諸師は各々所依の宗に依りて觀經を解するが爲め、却りて觀經を自己の宗意に釋し入るものなり。今善導は觀經に依りて宗を立する人なれば、寧ろ諸經を今經に釋し入る意なりと決す。文中、「和尚獨得觀經之深義。會諸經立一宗也」とある會の字は、今鈔卷頭に一部の大意を述ぶる文中に、開會とあるに應じたるものにして、天台家の所謂開會の義を意味するものにして、證空の學解が如何に天台の教學と深き關係あるかを推定すべき一材料なることを思ふなり。

第三問答。聖道の諸宗にも往生淨土の義を談ずるに就き、今特に淨土一宗を別立する所以を問ふ。此に對し、聖道門は隨機判法、今立つる淨土の正宗は隨法判機なりと決し。其の所以は、所謂諸宗は機の利鈍に隨ひ、四種の佛身佛土を説くが如し。今淨土宗は善導の指南に隨へば、淨土の佛身佛土を正しく報身報土と判じ給ふものなりとて、玄義分二乘種不生門の疏文を引用して其の義を成せり。而して、若し彌陀の佛身佛土が眞實の報身報土なりとせば、報身は常住なるが故に、もと

より入滅の相を説くべからず。然るに觀音授記經には彌陀佛に入涅槃ありと説けり。又報身報土とせば、報法は高妙なるが故に、小聖の階り難き所なり。況んや垢障の凡夫は、欣趣することを得ずと云ふ、玄義分に示されたる二箇の疑難を引用し、更に此を玄義分の答釋の文を以て其儘此を解説せり。即ち佛身佛土は報なれども、入滅の相を説くは新發意の菩薩の爲めの一往の方便説なり。又凡夫二乗が報身の淨土に往生するは、正しく佛の願力に乗托するが故なりと云ふ義旨なり。今斯くの如く、玄義分の二疑難と、其の答釋の文とを引きて、論述する著者の意趣は、此をこの第三問答の生起せし順序より考察すれば、略其意を得るなり。即ち聖道の諸宗は隨機判法の區々たる方便説なれども、淨土一宗は、報身報土と立て、而も此高妙なる身土を以て、二乘凡夫が救濟さるるは佛願力の存する故なり。假令入滅の義相を説くも、其は一類の機の爲めに暫く報身の上に於ける所現の應身の相を示したるものなり。機に隨ふて法の各別なることを立てず、寧ろ高妙なる身土に萬機等しく往生して救はるゝは、願力の故なりと、法の勝れたる所以を以て機の往生を判するが、淨土一宗の別立さるゝ所以なりと示す釋意なり。

第四問答。此は、願力を以て實報土に住すとせば、四十八願中何を生因の願と決すべきやに就き、玄義分二乘門の四十八願一々願言の釋文に依りて、第十八の一願を生因と決せり。此は證空の四十八願に對する根本的見解にして、本願の中心を以て、第十八願とすることは、他の述作に於いて明

瞭に示されたる義なり。證空が善導元祖の教系を承くる以上、理として當然の事なり。

第五問答。善導は四十八願一々願言設我得佛十方衆生稱我名號等と云へども、經の本願の文にはその一々に稱我名號の言なし。疏主は何を以て斯く云へるやに就き、第十八願を以て正生因の願とし餘の四十七願を欣慕の願とする義を説けり。此の釋中「生因の願、欣慕の願」と云ふ名目の出づることは注意に値するものなり。何となれば、古來本願の上に生因、欣慕の二意を分つことは、もと元祖が明禪、公胤、聖覺と共に九條兼實公の邸に會し、此の四十八願一々願言の文を講せしとき、初めて云ひ出されしものにして、其の際聖覺も此の義に讃同せしものなりと云ふことは、行觀の玄義分私記^五及び顯意の玄義楷定記^八に出づることなり。然し元祖の述釋中には、其の名目の出でしことを未だ發見せず。但に選擇集特留章に「四十八願之中。既以念佛往生之願、而爲本願中之王也」と云へる文ありて、而も元祖一代の勸化が、四十八願を第十八の念佛往生の願に該攝して化導し給ふものなる故に、此の本願の分類を今家にも元祖の釋出せられたるものとして認め來れるなり。然るに、今、行觀及び顯意よりも、遙か以前に出世せる西山派祖證空上人の述作に、此の名目の出づることは、此の名目の出でし古き歴史を更に強く肯定するものなり。即ちたとひ私記及び楷定記に出づる九條邸の記事が、全然事實にあらずとし、又元祖の初めてのたまひしものにあらずとするも、其は元祖の直弟子中に使用されし名目なることを此に推定し得ることなり。

因に記す 欣慕と云ふ名目は散善義^四を第三深信の文に出づるものにして、證空は此の語をとりて、第十八願に對して餘の四十七願を欣慕願と稱することは、玄他下(佛敎全書本二二頁上段)及び玄自、五(佛全本九六頁)に出でたり。他筆鈔の方は、第十八に對し餘の四十七は、第十八の所詮念佛の功德を證顯する願なる意を以て、此を能詮欣慕の願と稱し居れり。又、自筆鈔の方は一々願言の文を釋するに就き、觀門弘願の關係を以て四十八願を釋し、觀門の意に依れば、一々の願皆欣慕の義を成ず、弘願の義門に就けば一々誓願爲衆生故なれば、稱我名號若不生者の一願なりと釋せり。此觀門弘願、二門の交際は、此れ亦、能詮所詮の關係を以て見らるべきものなれば欣慕の義を能詮とすることは、自義他筆二鈔同義と云ひ得るなり。但し生因願欣慕願と云ふ一對の名目は、此の觀經疏大意に於いて初めて出づる所なり。而して今、他筆自筆鈔等の釋意を以て考察するに、今鈔に證空が第十八を生因とし、餘の四十七願を欣慕の願と釋する釋意も亦、能詮欣慕の義、即ち四十七願は第十八願の念佛の功德換言すれば彌陀の依正二報眞假等の功德相を開說證顯するものとして、此の欣慕の名目を使用する釋意なることを知るなり。故に西山の所謂欣慕と云ふ事は二善念佛、能所詮の一體なることを示さんとする替名にして、淨土家に於いて、前常餘の四十七願は淨土を欣慕し、此淨土への念佛生因を誓へる第十八願に入らしむる爲めなりと解する欣慕の義とは全く異なるものなることを思ふなり。

第六問答。次に第十八願を生因の願とせば、此の本願を念佛往生之願と云ふに就き、人師の解釋、此の念佛と云ふを或は觀念の念とし、或は、稱名の義と解す。善導は如何に解するものなるやに就き善導が定善義に第九眞身觀の念佛衆生攝取不捨を釋するに際し、三縁の釋を示せるを引用して此を釋せり。即ち親縁の釋には、疏主、念佛衆生を釋するにあたり、先づ初に三業に約して此を釋し次いで更に三業の外に別に別に憶念を以て此を解釋せり、故に、疏主の意は正しく憶念を以て弘願之念

佛と名くるものと決せり。

第七問答。然らば今云ふ憶念とは觀法の相を云ふものなりやに就き、然らず。「正しく阿彌陀佛の相好光明の功德相を見て、此の佛は眞實に凡夫を度する佛なりと心得て、歸命して信するを憶念とは云ふ也」と釋し、觀經流通分の何況憶念の文に就きての善導の釋、(散善義好九)、但聞三身之號尙滅多劫罪惡何況正念歸依而不獲證也とあるを引證し、以て觀法の義にあらすと決せり。

岳今私に此を考察するに、此の第六、七の二問答に於いて、鈔主證空が、本願の念佛を憶念と示すものは、此れ即ち證空特有の念佛論よりして釋出せる義門なり。實際證空にありては、念佛と云ふ意義は、極めて廣汎なるものにして、單に口稱の一行を意味するものにあらざるなり。即ち彼の思想全般よりして論ずれば、觀門の領解の上にては、定散二善が念佛なりとも云ひ得べく、之を換言すれば、一切の萬行は直ちに念佛なりとも稱し得べく、更に又此を擴張すれば、法界の萬象は悉く是れ念佛なりと見て、念佛の二字を以て宇宙法界の全體を統攝せんとすることが寧ろ其の根本思想たるなり。故に今證空釋義の一例を出せば、秘決集第十四(佛全本註。下段)には、明に「法界森羅萬象即念佛三昧也」と釋し、同第十八(頁四九。下)には、「往生行極念佛一行」乃至萬行皆攝念佛一行こと釋するなり。此の證空の念佛義に就きては、他日、更に論究を試みむとするものなるが、今要約して此を云へば、證空の考は、もと、彌陀の正覺は、法藏菩薩の因位中間の本願及び修行に依りて成

せしものなり。而も此の本願も修行も、其は共に所謂機法一體の願であり、行であるが故に此の法藏菩薩の願行具足成就は即ち彌陀の正覺の成就にして、同時に其は機法一體の正覺なれば、佛の正覺即佛體の成就是、此れ又衆生の往生行の成就なりと建て、此に所謂、生佛一體、願行具足の正覺は、直ちに生佛俱時成就の覺體なりと云ふ義を立説するものなり。而して又法藏菩薩の因位の修行は如何なる行なりしかと云へば定散萬行に外ならず、此の定散萬行に依りて彌陀の正覺の佛體を成せしものなり。故に彌陀の正覺の體の功德は何ぞと云へば定散萬行の功德なり。彌陀佛とは定散萬行に依りて詮はされたる佛體なり。而して此の佛體に不二なる名が所謂佛名、即ち名號にして、此の名號は稱ふべきものなれば、口業に詮はれては、稱名念佛となる。故に今此の論理を一體系に統ふる時は、此に因位の定散萬行、即果位の佛體、即佛名、即稱名念佛と云ふ論理の斷案を得。因位の定散萬行を能詮とすれば、果位の佛體及び名號は所詮なり。而して此の能所詮の關係を明に顯説せしものが釋迦佛所説の觀經なり、釋迦が正宗分に定散二善十六觀を以て淨土の眞假依正二報等の體相を説くは、實に此の彌陀の覺體の功德相を説きしものなり。即ち二善念佛の能所詮一體なることを説きしものが觀經に外ならず。而して此の能詮の二善萬行を更に萬機誘引の爲めに機の根性に隨ひ、各別の行業として開説せしものが釋迦一代の敎説なり。故に、聖道諸宗の分齋を以て、一代の敎説を望むときは、其は一々自方成佛の道を説きしものなれども、今此の淨土敎他力の眞意、即ち佛陀化導の根本精神よりして、深

く此を觀察するときは、一代教は實は能詮の二善行を、暫く萬機の根性に應じて自力成佛の道として説きしものなり。故に其萬行は、聖道一代教の面と淨土教觀經の面とに於いて、たとひ一は自力、一は他力の行として説かれ、其の位こそ暫く異れども、其實質を云へば、もとより一體の行業にして、觀門能詮の行を、行門自力一代の行と開きしものなり。故に一代教は、必らず觀經觀門の二善に歸入すべきものにして、其は此の觀經の二善念佛の關係をその基調として説れしものなり。同時に一代佛敎は、此を一言に概論すれば、實は機法一體の彌陀正覺の實體を開説せしものと見ることを得べきなり。加之、證空の一特殊法門の釋示たる彼の衆譬法門の義相、(無盡燈誌、第二十三卷第七號所載「證空上人の衆譬法門に就いて」の拙稿御參照を乞ふ)より更に此を見れば、此土は淨土の衆譬表現と見る考なるが故に、今の如く一代佛敎即定散二善即念佛と云ふ義が認めらるゝと共に、法界萬象即念佛と云ふ事が認め得らるべきなり。念佛を宇宙の事相に就きて云へば、此れ即ち森羅萬象にして、又此を言説に表現すれば、一代佛敎、此を要約すれば觀經一卷、更に要約すれば南無阿彌陀佛の六字名號に外ならず。此を亦、往生の行業に就きて表現すれば、定散萬業にして、此を能詮とし所詮の弘願念佛を詮顯し得べきなりと云ふが證空の根本思想なり。故に證空の念佛義は此を深く考察すれば、其は極めて廣汎なるものにして、同時に其は、漢和の大師に於いて未だ曾つて見ざりし深々の意義を有するものなることを知る。而してその念佛義の出發點が、機法一體の彌

陀の正覺成就と云ふ事にありて、又此の機法一體と云ふ事が、念佛義の中心思想なれば、此の機法一體の正覺と云ふ事を信知せずしては眞實の念佛は體現し難きものなり。故にたとひ證空の考が萬象即ち念佛なり。定散萬行即念佛なり。故にすべての行業は念佛なりと説くものと知りても、單に其のみでは、證空の念佛義の外形のみを捕へしに過ぎざる事となるなり。實に彌陀は、機法一體の願を建て、定散諸有の萬行を修したる故に機法一體の正覺の體を成じたまひしなり。故に佛體に不二の名號に於いて、吾人は萬行成就の功德を認め得べしと信知する所に、初めて諸有の行業は、念佛を詮顯する行として生き、同時に彌陀の覺體は、機法一體なれば、彌陀因位の願行が機法一體の願行なると共に、今日現前の吾人、一切衆生の行業も亦、廣く身口意の三業に互り、永く三世に通じて、彌陀覺體の功德を表現する行、即ち念佛なることが認め得るなり。善導が衆生憶念佛者佛亦憶念佛衆生。彼此三業不相捨離。故名親縁と云へるは、此の義相を釋したるものに外ならずと解するが、證空の見解なり。故に今鈔第六、七の問答には、また此の義旨よりして親縁の釋を説明し、念佛の意義を論述せるものなり。即ち第六問答には親縁釋の疏文、念佛衆生の經文を釋するに就き、初には身口意の三業に約し、後には憶念に約して説明せる事を根據とし、此の憶念とは弘願之念佛に名くるものなりと云へり。此は今予が論定せし、機法一體の謂れを、彌陀の十劫正覺の佛體に就き認め、その因位の願行及び果位の佛體・佛名の關係に於いて、機法一體生佛不二の義相を

證り、定散念佛の交際、即ち念願の眞實意義を觀知證得することを以て憶念の義となし、此を以て弘願之念佛と釋せしものなり。而して此の憶念の信心、即ち西山家に所謂證得の安心が一度決定すれば、機法一體の理として此に衆生の三業と佛の三業とは、一體にして不相捨離のものと知らるゝなり。行者の三業は其儘彌陀の功德相の表現として、此に所謂三業念佛の義は成立すべきなり。故に善導は此の憶念の信心に對して、文の初には三業に約して彼此の一體なることを説くものと見る今の釋義なり。(此の三業念佛の義は今日西山派に於いて「三業實現の念佛」と云ふ事を盛に主張する本源なり)。故に次の第七問答には、此の憶念の義相に就きて問答し、「見彌陀佛之相好光明之功德相也。此佛眞實度凡夫一佛也得意歸命信心憶念云也」と云へるなり。文は極めて簡要なれども、見阿彌陀佛乃至相也と云ふ迄は彌陀の體は機法一體生佛俱時成就の一覺體にして、此の覺體は、機法一體の萬行を以て成就し詮顯されたる佛體なれば、此の佛體の功德相、即ち光明相好の功德は、一として因位の定散萬行に依りて詮顯されざるものなしと觀知すべきなり。而して此と同時に此の佛體に不二なるものが名號なれば、彌陀の名號は、直ちに定散萬行を能詮とする所に其の實相を現し得。故に定散即念佛と信知する事を得べきなり。此の如く信知する事が佛を憶念する事に外ならず、而して此の佛體は機法一體の覺體なれば、如上の謂を知る所に「此佛眞實度凡夫一佛也」と知りて歸命の念を生じ得べきなりと云ふが實に今の釋示たるなり。

第八問答。前答を承けて彌陀の相好光明等を憶ふ事が憶念の義とせば、觀法の儀式も相好等を憶ふものなり。彼此の區別を如何に考ふべきやを決す。即ち聖道教の觀法は自力の觀法なれども、今淨土の觀法は、「歸_レ他力_ニ其_ノ上_ニ相好等_ヲ觀_ジ顯_スナリ。此即阿彌陀佛之以_ニ光明_ニ照_シ十方_ノ念佛_ノ衆生_ヲ攝取_ス不_レ捨。此相_ヲ觀_ジ顯_シ正_シ往生之定_ニ得_ル否_ヲ爲_ニ機根_ノ教_ヲ示_セリ」と示せり。此の中、歸_レ他力_ニ其上_ニ相好等觀顯とは、上に述べし機法一體の謂を信知して佛體即衆生往生行の真相を體得する事なり。故に次には此即阿彌陀佛等と示して、機法一體、佛體即往生行の義を以て往生の得否を決するものなる事を釋し、弘願念佛の意義を論定したるなり。

第九問答。彌陀の相好功德相を觀見することが、憶念の義とせば、若し此の機法一體の覺體の謂れを信知して、後更に聖道教の觀法を用ひて彌陀の相好等を觀せば、其の觀成するや否やを問ふ。此れ即ち換言して假に論ずれば、觀門他力の領解成じた上よりは、觀門能詮の二善と、行門教の二善とはもとより同一行體なれば、觀門の解を以て行門の行を修して可なりやの問なり。證空の意にては行門自力の執を翻して一度觀門他力の領解を得ば、行門の行はすでに其儘觀門他力の行業にして最早行門と名くべき行にあらず。其は既に所詮の弘願を詮顯すべき行なれば、能詮觀門の行業なりと見る見解なり。依りて答には、今_ノ意_ニテ_ハ觀門_ニ見_レ彼觀_ニ行門_ニ實_ニ今意_ニテ_ハ觀門_ニ成_ス可_レ云也と示し、證れる眼よりは同一の行なれども、聖道教はもと衆生萬機誘引の爲めに、暫く萬差の機根に隨

同して、隔別の機に對し、自力の機法隔別の意を表として觀法を説けるものなり。然れども今觀門他力の觀法は左にあらず。機法一體生佛不二の謂れを彌陀正覺の體に就きて憶念するものなり。故に此の憶念は云はゞ行者の歸依の一心にして、此の一心に依り弘願に歸すべきものなるが故に今は、自力の觀法に對して此の觀法は觀法とは名けずして憶念と云ふものなりと決せり。

第十問答。歸依の一心たる憶念の相狀につき問ふ。憶念心の内容は、先に論ずる如く、佛の正覺が機法一體、生佛俱時成就の正覺なる事を信するにあり。故に今は正しく機法生佛一體の願行成就の佛なる事を信すべしと示せり。文中、「彌陀^ハ以^テ我等^カ念力^ヲ成佛^シ我等^ヲ以^テ彌陀^ノ正覺^ニ可^レ出^ヅ生死^ト」と示し禮讚の彼佛今現在世成佛等の文を引證せるは注意すべき點なり。此れ證空の機法一體論を知るに最も適切なる釋と云ふべし。禮讚の文は、彼佛今現在世成佛の佛と衆生稱念の機と相望し、機法一體の正覺を此文に認むる意なり。即ち彌陀は機法一體の正覺を成せし故に、佛體即行、名體不二の義として、今日の衆生は他力の領解發得せば、彌陀の佛體に不二の名號を稱じて(念佛)往生を得と見る考なり。

第十一問答。かくの如く憶念の信心が必要の者とせば、必らず此を出すべきに、經文にも釋文にも何れも稱名本願の義を本とするは如何なる義意なりやに就き、此に證空特有の行信關係論を顯せり。即ち心に、佛の正覺の體は機法一體、生佛俱成の體なるが故に、此の謂を信する一念に往生すべき

道理を得と信すれば、必らず其の心に憶念されたる佛體は、口に南無阿彌陀佛と顯はれ、稱名行として現すべきなり。何となれば、佛體と佛名とは不二なるが故に、佛體を心に體得すれば、佛名を口業に現はすのみならず、心業には常に念じ身業には必らず禮拜の行として現すとは、名體不二を以て三業の一體を説き、三業念佛論を立つるも共に此に往生の行と信との交際を立説せんとするものなり。故に「出^三三業^二時。名體不二^一佛^{ナラガ}故^ニ口^ニ稱^{レバ}名^ヲ。正^{シク}彌陀^ノ全體顯^ル、ナリ。憶念^ノ姿顯^{ニハ}口稱^ノ阿彌陀佛^{ト云ル}、也。」故^ニ本願^ヲ釋^{スル}稱我名號^{ト也}と力強く名體の不二を論究せり。親縁釋に、三業に約する釋の外に、別に憶念の釋を立つるは、此の行信の關係を示したるものにして、憶念の信心がそのまゝ行として顯れしものが三業の行業にして、憶念の信が念佛と稱し得ると同時に、三業の行業も其儘念佛なりと見る考なり。故に又、機法一體の道理を心に領解せずして、單に、口に稱名する無信單行の行者ならば、その稱名は遠生の因となることを得れども、順次の往生は決得し難きことを示せるは注意に價する文字なり。

第十二問答。名即體の義に就き問起す。禮讚^六の光明壽命の無量なる故に阿彌陀と名くる文を取意引證し、堅に三世に互り、横に十方に遍し、一切衆生を攝取せんとする本願の極る所を阿彌陀と名くるが故に、「阿彌陀^{ト云ハ}其實體顯^ル、也。本願^ヲ憶念^{スレハ}口^ニ稱^ニ阿彌陀^{ト也}。」と云ひ、觀經序分の章提別選所求の文を引用し、章提が別所求の土を選びし時は、其の初めは彌陀の名を知らずして、光臺

に現せし無量淨土の中に於いて、先づ其の彌陀佛の淨土の體を見しものなり。其の體を見たる故に次いで阿彌陀佛所と云ふ名を擧げて所求土を別請するに至りしなり。此れ即ち體に不二なる名が、體に依りて韋提の口業上に顯れしものなり。依りて彌陀をば名體相即の佛と云ふなりと決せり。要するに此の釋は、萬物は名體の二を具す、名に依り體の何たるかに尋ね入り又體は名に依りて表顯さるゝものなり。故に、名と體とは相即不二のものなり。今彌陀の體相を心に憶念すれば、其は必然的に口業には名の表現即ち名號を稱ふる行業と現れ來るべきものなり。彌陀の佛體が、法藏菩薩の機法一體の願行具足に依りて、成じ詮はされたる、生佛俱時成就の覺體ならば、體と不二の名、即ち佛體と不二の名號に於いても此の機法一體の義相は認め得べし。佛體を念する憶念が念佛なる共に、稱名は亦念佛なり。此の稱名に依りて現する名號は是れ直ちに定散萬行に依りて詮顯される佛と體を表現す。故に名號の體の功德は因位の定散萬行を能詮として成せられたるものなると共に、亦、機法一體、佛體即往生行。名體不二の道理より、機の上に修する定散萬行は直ちに此の名號の功德相を其儘表顯するものにして、此れ又能詮の行と稱し得べきなり。而して此の名體不二、機法一體、佛體即行の謂れ即ち佛體の真相を證得する事が、憶念の信心にして、歸依の一心とも名けらるゝものなり。故に此の歸依の一心とは、要するに機法一體生佛不二の謂れを彌陀の覺體に就きて信知する事に外ならざれば、此の心はもと機の上に於いて發起するものに相違なけれども、實に法を

離れて生起せざる機法一體の信心なるべきなり。何となれば、もと彌陀の因位に於ける願心の發起は、機の願心を離れて成すべからず。必らず機の願心を體に得て成せし、機法一體の願心なるべきなり。故に今機か願心を發得しても、其が自力機法各別の心ならざる限りは、其は機法一體の願心にして、法の願心の機上に實現せし機法一體の願心なるべきなり、機法一體の謂れが、法の上に於いて現せられしと同様に、機の上に於いても成せらるべきものなりとは、證空の強き信念にして、此の機法一體名體不二の義相は、明に、他の述作中に於いても認め得べき、彼の根本思想なり。故に此の第十二問答には名體相即不二の義を論述したる後、次いで善導の言南無者の文を引き、「此彌陀體既成。必可念衆生有之」と示し、次に此の一心を開きしものが經の三心なりとて、三心の釋をなせり。此文は極めて簡結なれども、憶念の信心が機法一體の心にして、機法一體なる彌陀の願心が、機の上に於いても同様に發現すべきことを示したる文字なり。彌陀の佛體は一面此を觀察すれば、因位の機法一體の願行に依りてなれるものなり、故に佛體成すれば、其は機法一體の覺體なるが故に、必らず機は機法一體の願心を發得する所に此の覺體に一致歸入し得べきなりと云ふ釋示なり。従つて又、佛體に不二相即なる佛の名號上にも此の機法一體の願行の義相を認むべし。善導が佛名につき、南無は發願廻向なりと示したるは機法一體の願を示す、また阿彌陀佛は其行なりとは、機法一體俱得成就の體即ち衆生の往生行の成就を示す、故に此は機法一體の行を意味すと見る

考なり。而して、南無の願心が、機の上に實現せし相が、憶念心、即ち歸依の一心、即ち此を開けば、三心なりと云ふ見解なるを以て、次には此の三心につき、一々仔細な解釋を施せり。而して今此三心に就きては此處に詳しく論究すべき筈なれども、寧ろ證空の他の述作上に釋せられたる方一層詳しきを以て、今此を省略せむとす。第一の至誠心を以て、機法各別の自力心を斥け、行門自力の行を捨て、機法一體他力の謂より觀門の行を取る心とし、自力他力を分別する心と釋し、第二の深心は、彌陀の願體に就き觀門の謂れより、萬善萬行を他力往生の行因、即ち能證の行と認むる心と見、第三廻願心は、行者が機の上に於ける三世の萬行、自他の善根はすべて彌陀の功德を表現する善行と認むる心なりと釋したる事は、證空常例の釋示なり。而して此の三心釋が次第の如く、廢立、傍正、助正の義に配當され得べきものとして、後世、西谷一流には、此の廢傍助の三重を一具のものとして、所謂三重法相なるものを立説するに至りし事は、汎く人の知る所なり。深心釋中、法深信の文に、「萬善萬行ノ因ハシナジナナレバ。此彌陀ノ本願ニ不レシテ寄ラ惣レ不レ可レ生ズ。若依ニ本願ニ我等罪惡ノ身ナリトモ離ニ生死ニ事一念モ無疑等」と示したるは、西山特有の釋にして、若し今家我宗祖の二種深信に對する見解か、定散二善を廢して弘願念佛の一行を別立する事を中心として見給ふものなることを思ひ、彼此の釋示を對映すれば、兩宗祖の釋義が全く其の根底より異なるものなる事を知るなり。第三心釋に「一切ノ萬行萬善三世ノ善根。自他ノ善ハ皆阿彌陀ノ功德也。此各々別心ニテ修行ノ間ハ難シ

成じ。今、歸スレハ弘願ニ即是其レ體一也等と示せる釋も亦好く證空の釋意を窺ふに足るものと云ふべし。

而して、次に此の三心即ち一心の憶念が相續すれば、此に此の信心は三業の行業と相應して現す。

故に、此に彼此三業不相捨離の義立ちて自ら四修の作業は具すべきものとして四修の釋を施せり。

第十三問答。善惡の凡夫共に弘願に歸して、成佛すとならば、惡凡夫は歸弘願の後と雖も造惡を止め難きに至らずやに就き、觀門弘願の交際を立つる以上は此の難來るべき筈なし。釋尊の教の方より云へば、一分の惡も三塗の因、一微少の善も淨土の因と説く、故に造惡はたとひ、弘願に歸して機法一體の往生の眞義を證悟すとも、作す可らずと示せり、證空の釋意、歸弘願は、善惡機法の一體、生佛不二の往生を示すものなれば、是れ平等性を示す、又觀門の上は機の根性に隨ひ、定散萬機と分ち、以て所詮の一弘願の體を詮顯する能詮と見る考なるが、故に、此は即ち差別性を意味すと見、差別門にては永久、惡を捨て、善を取る義を示し、平等門にては、機法善惡の一體なることを證得する事を示さむとするものなり。故に更に

第十四問答。に來りては、造惡を誡むる文趣に就き問答し、觀門弘願何れに偏しても、必らず誤りなる事を示し、下々品の疏文大經の唯除五逆誹謗正法に就きて抑止攝取の義を出すを引證とせり。

第十五問答。觀念法門に引用せる般舟經の文意に依れば、三世諸佛依念彌陀佛三昧成等正覺なり。

即ち三世の諸佛の成佛は皆彌陀に依ると見ゆ。然るに今、大經の文を見れば十劫成佛の事を説く、

若し大經の十劫成佛説に依れば、十劫以前の衆生は必らず彌陀の力に依らざる事となり。又彌陀は五十三佛に依りて成佛せし佛なりと云ふ義も彼此相矛盾するに至らずやと問起し、此に對し、此等の説相はすべて皆觀門の敎説なりと決し、次に理性と事相との關係、佛性と始成正覺との關係を論じ、觀門弘願二門の交際を論じ居れり。今要文を抄録するに、先づ

無始性德ノ理ノ中ニハ正度ニスル凡夫ニ事有レ之、名ニ阿彌陀一。然ラレ理性ノ故ニ此ノ功德、凡夫聖人ノ心中ニ皆遍滿ス。此ヲ即佛性ト云者是也。

と示したるは、證空の理性論に對する見解なり。即ち證空は理性を解するに、全く天台の實相論的考を以てし、常に、機法生佛は本來一體一如のものと見、差別の事象界にありても機法は一體、平等の理性界に於いても生佛善惡は一體なりとするものなり。故に今理性を釋するにも、此を彌陀とし、此の彌陀は善、悟の性を表するものならば、此の善にして、悟なる彌陀は、惡にして迷なる凡夫の性を離れて存在するものにあらず、理性が善ならば必らず、其の一面は惡を一如宛然として具有し居るべきなり。即ち換言すれば、無始性德の理の中には悟れる彌陀の法は、正しく迷へる凡夫の機を度するものとして、即ち機法生佛は一體一如の實相宛然たるものとして存在せざるべからず。若し然らずば、此の理性が事相界へ發動しても、迷悟善惡の對立は認めがたし、若し理性が單なる善のみのものなりせば、其がたとひ事へ表現しても善にして、全く惡とは關係なし。若し又、理性

が單なる惡のみのものなりせば、其が假令事へ表現しても惡にして、善とは關係なし。佛の理性が永久善のみにして、凡夫の理性が永久惡のみならば、佛は永久清淨なる佛にして、罪惡の凡夫を救ひ難かるべく、又、凡夫は永久罪惡の凡夫として留りて、長に清淨なる佛地に昇り難かるべし。佛が凡夫を救濟し、凡夫が成佛し得るは、佛の理性も、凡夫の理性もそは本來機法一體不二のものなるが故なりと、諸法實相論の見地よりして、事理の何たるか、その交際の如何を説明せんとするが證空その人の考なり。依りて今の釋にも此の考が自ら表明されて、理性を説明するに際して、凡夫を度する彌陀が理性なりと説き、此の功德は凡聖一切の心中に遍滿するものにして佛性なりと信するなり。文裏に現はるゝ釋意は、證空の他の述作を見れば自ら其の意を得べし。彼の四十八願要釋下、(佛全本_西下段)秘決集第十四(註_西下段)定善義自筆鈔第四(註_西下段)に出づる法界身に就きての釋を見れば、證空の釋意を窺ふに足る。乞ふ參照せられむことを。

而して、此の理性即ち佛性が、如實に事の差別界に於いて法の善性即ち悟性を顯理せしものが十劫正覺の彌陀にして、凡夫を度せむ爲めに、機法一體、願行具足、生佛俱時成就の正覺を成じ、西方淨土の主となり給へるなり。又此の理性の善性即ち悟性の方面が如實に顯現せずして、惡性、即ち迷性の方面を表に顯現せし相狀が、今日の迷へる凡夫界なり。善性即ち悟性とは機法一體の實相を如實に體現せんとする力用にして、又惡性即ち迷性とは此の實相を不如實に體現し、機法生佛は

本來各別のものど執せんとする力用なり。故に悟れる佛界には、此の機法一體の生佛不二の實相は如實に顯證さるゝものなれども、此に反して凡夫とは、惡性即ち迷性の顯現せる境界なる故に、本然の理性たる機法生佛一如の相狀は、その裏面に隠れ、所謂機法一體の佛性なるものは、潜在的に存在すと見るが、理性に對する事相界に就きての證空の見解たるべきなり。故に彼は次いで

然^ル此有^ル理(理性即ち佛性——機法一如の理體を云ふ。)時^ニ不^レ知^ラ凡夫^ハ故^ニ不^レ覺^ラ。(以上は凡夫の相狀を云ふもの)

此^ヲ以^テ智^ヲ爲^ス凡夫^ノ事^ニ相^ニ顯^ス時^ニ阿彌陀^ト云^テ指^ク方^立相^ノ西^ノ方^ニ有^リ佛^云也。故^ニ離^ニ生^死事^不レ^依事^ニ何^ソ然^{ラン}乎。然^テ顯^ス事^ニ者^依願^攝取^衆生^也。故^ニ發^ス願^佛號^故ニ^必有^レ始^云也。如^レ此始成正覺、相^ヲ爲^レ機^ノ說^故ニ^十劫^ト云^也。(以上は彌陀佛の相狀を述べしもの)

此所說^ハ皆觀門^之說相也。(以上を結ぶ。)

弘願^ノ方^{ヨリ}即^云レ^バ之^一。一切成道^ノ劫數^ハ幾^ト云^事不^レ可^レ定^ム歟。

と釋し。理性と事相との差別を明瞭に論定し。此を弘願と觀門との二門に配せり。かく事相理性の實際を明に論述する事は他の述作には餘り其例を見ざる所なり。

而して、三世諸佛依念彌陀成覺と云ふ事も此の義相より論定し得べし。即ち所謂一切の應身と云ふは、此の機法一體生佛俱成の覺體の顯現として彌陀報身の實相を更に凡夫の爲めに説き顯さんと

て穢土に出現せし佛身に外ならず。加之、一切の菩薩も緣覺も聲聞もすべて機法一體の實相の理性即佛性の何たるかを、彌陀の正覺成就に基いて此を一切衆生の前に説示する聖者なり。換言すれば衆生に各自佛性の如實の證得を促す教主なり。釋迦とは、此の諸佛聖者衆の張本なりとは此れ又、證空の諸佛菩薩論なり。故に此の義を述べたる後、釋迦の聖道敎が暫く凡夫を各別に敎化して、根性の不同に隨ひ各種々に説くと雖も實は彌陀の佛國に歸せしむる爲めに外ならず。十方三世の諸佛も、萬善萬行の修因も、皆彌陀一佛の功德を種々に説き、以て衆生を敎化するものなり。かく意得るを觀門の智と名け、亦は三心と名くと結釋し。而して次に此の事理論は天台所説の隨緣不變の兩眞如の義に當るものなる事を述べ、兩眞如の相を釋せり。此に於いて特に注意すべきは、今鈔に於いて此の明瞭に天台の眞如觀を出し、以て、證空が自己の信奉する淨土敎に於ける迷悟、事理の關係を説ける事なり。證空の他の述作中には、理性即ち佛性の何たるか、彌陀と衆生との關係に就いては、實に縱橫無盡に論述せるを見受け而も其が全く天台の諸法實相論の思想を繼承し居れるものなる事は、推定するに難からざるものなり。然し乍ら今鈔の釋示に於ける如く、明瞭に天台の眞如觀に同すと著者自ら明言せるはなきなり。されば今此に至り、此の證空の言明を見るは更に其の思想系統の如何を定むるに就き大に力ある事を思ふものなり。敢えて一言して西山義研究者の注意を促さむとす。

第十六問答。天台には四土三身の説を立つ。淨土門には三身の義を立つれども、四土の説を立てず如何意得べきやにつき、淨土一家には、土に於いては淨穢の二土を分つのみと決し、今宗の意より對判すれば、報身とは自受用身、土とは四土中にては實報土寂光土等の分齊に當ると説き、願力所成の土を報土と決し平等性を認むるは、弘願の義相、機の差別相に對應し、其の上に位次深淺を説くは、弘願に離れざる觀門の説相なりと説く點、證空特有の考なり。

第十七問答。極樂淨土に於ける位次深淺は如何なる義を示すものなるやに就き問答す。答説の文、寫誤多くして、文意明め難きを以て、今は此が論定を暫く見合さむとす。良本を得て他日の研究に譲らむとす。

第十八問答。自力の時には一切の善根皆雜行と稱すべし。他力に歸し弘願念佛の實義を證り、正因の謂れ立ちぬる上は、一切の善根は正行と稱すべし。然らば、雜行と名のつくべき行なきに至るか如何。又稱名念佛の一行は此を本願の行と誓ふ。然るに般舟讚誦には、持戒念佛誦經專等と云ひ、親緣釋には、三業の行を列ね、又五種正行の中には第四を稱名とす。此等の釋は、諸善念佛を同等の行とする意か、如何。かくの如く稱名を勝行とすると同等とするとの二釋あるは如何なる理なりやに就き、正雜二行、正助二業の意義及び憶念と三業との關係を最も簡明に論答し、信行の關係を明にせり。此は他の述作に出づる義相と全く同一なり。但し注意すべきは正行と云ふ名目に就き四種

の分別を立て、一^ニ憶念正行、二^ニ口稱正行、三^ニ五種正行、四^ニ九品正行の義別を明示せる事なり。證空の考を窺知するに最も好き釋示なり。

第十九問答。觀門の解を發得して弘願に歸する上は、定散二善は九品正行なれば、必らず此を修すべきや、或は口稱一行を限り修して餘行餘善は此を廢しても往生すべきやに就き、九品正行の眞義を述べ。要するに、機根の不同に依りて何れを修するも障りなし機の堪不堪に任すべしとなす見解なり。但し散善よりも定善、一善より二善と行修の策勵を見るは、一切の萬行を彌陀弘願の^一法より開出されたるものと見る信念上よりは、將に然るべき事なり。此の釋意亦、他の迷作、殊に他筆鈔に明に出づる義相なれば論ずる迄もなし。

第二十問答。念佛の數遍に就き論議す、九品正行の立場より機の堪不、壽命の長短に任す事は、此れ又上來の所論よりしても推定し得る所なり。

最後に、**華座觀三尊事**と票目を掲ぐる下には、又重ねて二問答を施設せし事は上に述ぶる如し。

此は序分の光台現國と、正宗華座觀の三尊出現と、得益分の見國見佛の文とに就き例の現說一同、聞見一同の義を論定せしものにして、他の自筆他筆の鈔等に出づる釋義なり。依りてまた今此には、其の論究を省かむとす。

以上要するに、佛陀が定散萬機を誘引する爲めに、暫く差別の機根に應じて説かれたるものが、隨機判法の聖道教なれば、此の定散萬機が調熟されし上は、此の聖道一代の行門教を、正しく淨土觀門の他力教に會入して、その八萬四千と分れたる定散萬行は、觀門能詮の行なりとして、弘願念佛の一法を詮顯するものと開會せしむべきなり。此の眞實教義を説きしものが觀經の説相にして、此の謂れを信知する觀智が、經の三心なり。此三心合すれば歸依憶念の一心に外ならず、此の一心成する所に生佛機法は一體一如の實在として如實に顯現し、その眞實の行用を其の三業に表現するに至る、此れこそ他力の正行にして往生淨土の大行なり。此の謂が體得さるゝ所に、佛身佛土の意義も此の界の存在も、將た又此の身の實在性も認め得べしと云ふが此鈔一部所明の大意なり。されば結歸する所、此鈔は證空の思想及び其の教義を極めて簡明に縮寫せしものにして、實に證空其人ならでは、恐らく論述し難き書なる事を思ふと共に、此に又予は此書述作の年代、場所、對機、及び其由來等は何一つ判明せざれども、其の所述の内容を以て、此は正しく證空の述作なりと決定するに躊躇せざるものなり。實に此鈔は僅か十六紙の小冊子なれども、他の自筆・他筆の兩鈔・其他事相鈔等の大部の述作と相待ちて、證空特有の教義を詮述せしものにして、寧ろ、此等大部の鈔を熟讀玩味する處に於いて、初めて、其の釋意を窺知し得べき書なる事を信するなり。上來管見の一端を披歷す。或は派外の身として誤解もあらむ。願くば同學の友よ、訂正の勞を惜しむ勿れ。(大正十一、三、九)